

第9期県民生活審議会第2回全体会（概要）

1. 日 時 平成24年9月13日（木）14：30～16：30
2. 場 所 パレス神戸 大会議室
3. 出席者 委員：鳥越会長、上杉副会長、加藤部会長、上羽部会長、小西委員長、浅井委員、浅倉委員、井原委員、岩木委員、岩成委員、大前委員、木田委員、北野委員、清水委員、滝川委員、田中委員、玉田委員、野崎委員、幡井委員、服部委員、藤浦委員、村田委員、恵委員、安平委員
県側：山内政策部長、横山県民文化局長、村上生活消費局長、川村生活消費局参事、手塚県民生活課長、竹村協働推進室長、久戸瀬副課長、有吉県民生活課課長補佐、春名社会教育課主任指導主事、幹事課室、県民局、関係機関ほか関係職員

4. 内 容

(1) 政策部長挨拶

- ・ この審議会は第8期の答申を具体化するという趣旨で始められ、これまでの会議で委員にいただいた意見を元に、今回骨子案をお示ししている。
- ・ 新しい自治の姿として“ふるさとを大切に思う共通感覚”をはじめ、いくつかの項目でたたき台を作成している。
- ・ 今後どのような地域を目指していくのかといった、具体的なイメージについてご審議頂き、提言の骨格が見えてくるようになればありがたい。

(2) 資料説明について

- ・ 事務局から資料1～6に基づき説明

（会長）

- ・ 素案まで出来ていて安心する反面、印象としては背骨が無い。審議会として知事にサジェッションすることは何か、と一言と言えるものが必要。
- ・ 第8期からの流れとして、社会的孤立を防ぐ地域づくりということで、具体的な施策は各部局に任せながら、孤立というものを考えてきた。
- ・ 県民交流広場のアンケート調査によると、目立つのは無関心の人が多かったこと。無関心の人はいても良いと思うが、輪の中に入っていけず、無関心にさせられている人については、今期反省として考えていかなければならない。
- ・ アンケートでは県民交流広場がNPO等の外との連帯が弱かったことがわかり、一見悪いことのように思えるが、事業がコミュニティを中心としたものである以上、本当に交流しなければならないかを考えてみる必要がある。
- ・ 兵庫県は県民生活が豊かになるよう、基本的にコミュニティ強化へ進み、小学校区を軸に展開してきたが、コミュニティの範囲を見直す時期に入っているのではないかと。自治会等の小学校区より小さい単位や、逆に中学校区というような考え方もあって良いのではないかと。
- ・ この審議会はこれまで家族の問題に入ってこなかったが、果たしてそれでよいのか。地域社会の中で家族をどう活かしていくかを考えると良いかもしれない。

- ・ 兵庫県では県民の人間関係に注目してきて、その人間関係の強さが一つの資源となっている。その資源を有用に活かすというプラス面を提言にどう書いていくか、検討する必要がある。

(3) 意見交換等

<審議会提言の背骨について>

- ・ 会長の「背骨づくり」とは新しい自治、まちの形ということだと理解している。
- ・ 審議会が新しい自治の普遍的なものを目指すのか、全国に先駆けた先進的なものを提言するのかなどと言えば、私は普遍的なものだと思う。普遍的なものでも兵庫県で出すものは実は先端的なものがあり、県内だけに留まらない普遍的なものがあると意識して議論したい。
- ・ 背骨になるものは、全国に先駆けた先端的なものではなく、私たちが提言することで、それを地域がそれぞれ工夫し、料理していく性格のものだと思う。

<地域の多様性、個性>

- ・ 兵庫県は旧五国が一つになって出来た経緯から、これまでの施策展開も地域特性を理解しながら施策を展開してきた。
- ・ 地域への帰属意識やふるさとへの関心については、そのまちの歴史の長さや住民の職業、そこでの居住年数の長さに応じて違うのは当然で、ふるさと意識のあるなしを一律に分析して、こうあるべきだという理念で全体を作ると無理が出る。
- ・ 地域にも個性があるので、同じ小学校区でも、校区ごとに持っている問題点を、地域相互に長所を発揮しながら補えるように施策を考えれば良い。
- ・ 地域ごとの個性も考えた地域自治の創造を明確にして欲しい。
- ・ つながりが希薄になって欲しいと思う地域と、隣は何をする人ぞ、という地域を1つにまとめて書くのは無理がある。

<“つながり”、“自立”の捉え方>

- ・ 生きる意味を持っている人間がつながりを求める、協調するのだと思う。いじめや孤立死等もつながりを持ったら無くなるというより、むしろ生きる意味を考えるような仕組みがあれば、自ずから協調が生まれてくると思う。
- ・ 自立が自立を生むのではなく、共助が自立を育むと思う。自立を生むような共助やつながりというものが社会の根幹にあってしかるべき。
- ・ 8期で審議してきたつながりの変化がある、ということを基礎に、つながりの変化の中にはある程度押しとどめられるものと、どうしようもないものがあるので、どう切り分けて今後の方向性を考えるか議論すべき。
- ・ 若者が多い地区で、一時的にしか住まない人は支え合わなくても困らない。健康不安や孤独死の可能性に若い人や中年の人が関心を持たなくても、それはそれでよい。

<個人の責任や自立が第一>

- ・ 一人ひとりがどうあるべきかは書きにくい所だが、今期では提言して頂きたい。自助、

共助、公助という言葉に戻らなければならない時代で、個人の責任、個人のあり方というのが非常に問われているので、それが表題に出てくるべき。

- ・ 共助が自立を生むという話があったが、自立が共助を生む、ということもある。もちろん、地域や公的なものが助けるが、まずは、個人が頑張らなければならないし、頑張っている人を評価するということが必要。
- ・ 個性が非常に尊重されているが、一人ひとりのマナーや分、規範意識が非常に低下しているところに色々な問題があるので、その部分を提言に入れて欲しい。
- ・ 防災訓練時に親子が集まっても、たむろして遊んでいるのは子どもの親。親の教育自体、根本から直さなければならない。このあたりも今後の方針として考えて欲しい。

<地域の担い手育成について>

- ・ 押しとどめられないつながりの変化に対しては、新しい手法が必要。新しい対応の一つとしては地域の担い手づくり。
- ・ 新しい地域自治を作るのは、リーダーが必要。地域ではリーダー不足で困っている。提言ではリーダーの育成というのを具体的に盛り込んで欲しい。
- ・ 地域活動の場面では、固定メンバー以外の人にどう関わってもらえばよいのか、という部分が悩み。こういう形で多くの人を巻き込み、担い手がどう増え、こういう団体と繋がった、等の観点から事例を整理すると、今後はこれをモデルとして、地域活動の活性化の支援施策に結びつくのではないか。
- ・ 地域団体で同じ人がずっとやっているのは、後継者がいないからではなく、後継者を育ててないからでは。権威主義的だったり、みんなの意見を聴かずに進めたり、好き嫌いでやるような空気があると、新しい人は入ってこない。
- ・ 新しいリーダーを育てるには、オープンに意見を言う場が必要なのと、ボランティアでは続かない面があるので、コミュニティビジネス的にきちんとやれる、専門性を持った団体として育っていくような施策展開が必要。
- ・ 主体を県民にするのは第一だが、特に若い世代は県外、海外からも積極的、消極的、偶然も含めて入ってきているので、そこへの言及も必要。

<人を動かす方策>

- ・ どうすれば、地域の人に広報、周知出来るのかというのが自治会の課題。人の趣味等がそれぞれ違う中で、参加募集などをしていても回覧を見ていない。
- ・ 東日本大震災でも、普段無関心の人たちが東北に行って助けた。目の前に心が動く出来事があれば人は身体が動く。この原点に立ち返る必要がある。今回の提言の中に心が動く仕組みというのをテーマにしてはどうか。
- ・ 中東やギリシア、原発のデモでもツイッター、フェイスブックなどのソーシャルメディアを通じて人が集まっている。言葉で心が動いて、その言葉で身体が動くということが可能な世の中になっている。
- ・ 地域が繋がることで何が起こり、繋がらないことでどんな事態になるのかを、みんなが自分事として捉えられる言葉で提言の中に持ってくると良い。結果を先に示すと、心が動いて身体が動く。

<県民交流広場の評価等>

- ・ 県民交流広場は、既に拠点施設となる公民館が各地区にあった市でも、補助金をもらわないと損だと作り、結局は誰が行っているかという、連合自治会長と役員が交代で行っている。
- ・ 県民交流広場は広報が行き届いていなかった。これは過去のもので、社会は大きく激変している。私たちはもっと考え直さなければならない。
- ・ 5年間やってきた県民交流広場は一つの大きな社会実験。やりっぱなしではなく、その中からきらりと光る、面白い活動をどう評価していくかを、提言に盛り込んではどうか。
- ・ 県民交流広場の事例がこれだけあるのは一つの宝物。これを大事に、ステップとして次に行けたらと思う。
- ・ 資料2（県民交流広場の評価と検証）は、一つの事業を検証し、評価して、課題をはっきり出しておりとても良い。
- ・ 県民交流広場を実際にやっていたが、色んな団体や世代の人が入ってもらえるようにし、5年間続けてきて、これからも続けられるようにやっている。成果は疑問視されているが、やっている方は一生懸命やってきている。

<地域の範囲>

- ・ 地域の広さがどの範囲を指しているのか錯綜していて、向こう三軒両隣、校区もあれば、市町もと、ごちゃ混ぜに分析されていてわからない。
- ・ 自分たちはどういう地域を想定しているのか、兵庫県なのか市町村なのかについて、ある程度前置きが欲しい。
- ・ ソーシャルネットワークを使うと若い人には良いと思うが、それは地域ではない。そこで自治との関係はどうなるのか、という辺りはもう少し詰める必要がある。

<学校と地域の関係>

- ・ 主体としての小・中・高校にいる先生や生徒などの人間と場所についての議論がどこにあるのかなと思う。
- ・ 元々学区というのは、住民が学校を支えるという実質的な機能を果たしていたが、教育の自立性が強調されるようになり、学校と地域の間やや壁が出来た。しかし今見直されているのはみんなで共有し、共通で使うものというものが地域のコアになっていくという考え方。学校については、どの地域にもあるのが大きいところ。
- ・ 学校は住民を抜きにして考えられないが、これまでは教員が地域と関わることに及び腰だった部分もある。今、住民と学校の教員が一体になることが、子育てだけでなく、地域づくりにも有効だということが、どれだけ浸透しているかが問われている。
- ・ 学校支援地域本部なども、学校を応援するためだけに地域の人が協力するのではなく、地域の組織の中で学校も重要な構成団体だという位置づけになっているかが問われている。

<提言のまとめ方>

- 提言骨子案は精神論的な書き方ばかりなので、もう少し具体的な方向性を入れた方がよい。これは新たに考えなくても、既に行っているものの中にもあるので、それを拾い上げることが必要。
- 県民生活審議会での議論は、今の社会が被っている大きな変化の中で、産業経済以外の部分を全部受け止めていると言える。そのことを意識して提言をまとめていくと良い。
- 今の世の中の大きな流れと現状を整理し、そこから暮らしやすい兵庫県というものを作っていくためには地域自治として何が必要かということは示せる。そこから目指したい地域の姿になってないのは何なのかを分析し、何をすべきかについて提言していくことが必要。
- この提言では、価値観を押しつけられているような感じがするので、**価値観に関わる**ところは抑えて、自由に助けたり、助けて欲しいと言えるような社会をどのように作るかという方策の**ところ**を具体的に出すようにしてはどうか。例えばということで**一つ具体策をあげれば、地域課題等について学んだり解決策をともに考えたりする機会をつくる**ことがあげられる。地域課題についての**学習機会**であれば、いきなり半ば強制的な**かたちで活動等に組み込まれるよりも気楽に参加したり様子を見たり**ことができ、**合わなければそれ以上関わらなければよいので参加しやすいのではない**か。
- 提言骨子内容は非常に理想的な生活で、綺麗にまとめすぎて問題がわからなくなっており、兵庫県の特徴が何も無い感じがする。
- 提言骨子に書かれている新しい姿とは一昔前の日本の生活そのもの。それを新しい環境の中に適合させていくかを全部提言するとなると、こんなことは本当に出来るのかな、と提言の実現性が疑われる。

<タイトル、前文等の文言>

- 経済至上主義、競争社会の中で排除される人が出てきた。社会の価値観が変わらなければならない時代が来ている中、これを新しい自治の姿に大きなバックボーンとして入れる必要がある。
→これは、社会の価値観の変化について書くべきというご指摘。「提言の目的」のあたりで、それを踏まえた形になるかと思う。
- 提言をまとめる上で、新しい自治の姿を意識して、最初のリード文を考える必要がある。
- 提言でいう地域自治は、地方自治とは違い、絆とか支え合いなどもっと狭い意味。そこをわかりやすく書いてもらえると、提言の重点がわかりやすくなる。
- 第9期素案のタイトルで「新しい地域自治の創造」と「みんなでつくる兵庫のふるさと」とあるが、概念の異なるものが並んでいるので、「兵庫のふるさと」については再考した方がいいかもしれない。
- 「提言の目的」に書いてあるのは、目的ではなく、背景である。県民が重要と考えている価値観や生き方を示すのが、審議会の提言の目的ではないか。
- タイトルには提言の肝が示されているはずだが、“新しい地域自治の創造「みんなで

つくる兵庫のふるさと”では何も言っていないのと同じ。「兵庫県民は必ずコミュニティに参加していて、寂しくない県民ですよ」というような内容を書けば、提言の内容が一言でわかる。

- ・自治のあり方を提言するのか、支え合う社会づくりをするのかどちらなのかと気になった。どちらかに焦点を合わせれば良い。

<事例の扱い>

- ・事例を整理する時に「何をやっているか」ではなく「どうやってやったか」で括って欲しい。何をやったかをまとめても、そこから今後の方向性は見えてくる類のものではない。
- ・事例に記載されているような人たちが、時間的にどう仕事を受け継いでいるか、それぞれの組織がどのように連携しているかなど、組織としての継続性を保てるような、ある種の事例を整理して残すことは非常に重要である。

<提言内容の施策化>

- ・個の幸せをどう守るかというあたりが、どう県の施策に繋がっていくのか見えにくい。
- ・県があまりにも阪神・淡路大震災を中心に施策をしすぎた。震災の被害を受けたのは1/3の地域で残りは今までの生活をしている。
- ・提言骨子の推進施策の部分は、もう少し絞った形で、コミュニティをどう作るか、それを県がどのように支援するか、県民が自分たちでどう作るかを示して、全部を網羅するのではなく、一つ二つを提案してはどうか。
- ・前回の部会では、県民交流広場の資金の配り方に関して課題があったという意見があったが、市町の観点が入っていないと、今後も施策化していく時に同じ失敗をするのではないかと思う。市町の観点とどう繋がるのかという視点は必要。

(4) 県民文化局長挨拶

- ・本当に深くて、経験に基づく良い意見を沢山いただいた。
- ・いただいた意見をどうまとめるというのは、すぐにこの場では申し上げられないので、今後部会長などにご相談しながら、考える時間をいただきたい。